

助数詞「つ」の使用範囲に関する一考察 —母語話者アンケートを用いて—

小野寺 樹璃

キーワード 助数詞、「つ」、プロトタイプ

要旨

助数詞「つ」に関して、先行研究では「つ」の使用範囲が拡大してきているという指摘がなされている。しかし、どのように使用範囲が拡大しているのかを見た研究は、管見の限り見当たらない。本研究では、大学生が助数詞「つ」をどのように捉えているのかをみるため、日本語母語話者を対象にアンケートを用いて調査を行なった。その結果、「つ」よりも本来使うとされている助数詞を使うという回答が多かったもの、本来使うとされている助数詞よりも「つ」を使うという回答が多かったもの、どちらもみられた。また、指示対象の形状や発話がおかれた状況によって「つ」の許容度に変化がみられたり、数による違いがみられた。これらのことから、助数詞の使用には、数えるものの形状や状況、助数詞自体の使用頻度、数字の大小など様々なものが影響していることが明らかになった。また、個々の助数詞のプロトタイプから遠い時に「つ」が使用されやすい傾向がみられたことから、プロトタイプとの関係性が示唆された。

1. はじめに

我々は、何かを数える時に、「1本、2本…」というように、「本」や「枚」やその他の様々な助数詞を使用している。助数詞とは、数詞にそえられ、数えられるその対象（もの・こと）の性質・形状・様態・種類などを表わす語（三保 2006: 22）であり、類別詞と言われることもある。日本語の助数詞は助数詞と同じ働きをする名詞を含め約 600 語ある（飯田 2004）と言われているが、日常的に使われている助数詞は、その中のほんの一部である。日常生活の中で、助数詞がどのように使われているのか考えてみると、「箸を1つください」や「今日、映画3つも観た」というように、箸や映画などを「つ」で表現することが多々あることに気づく。本来、箸ならば「膳」、映画なら「本」という助数詞があるにも関わらず、である。

助数詞「つ」の使用の許容範囲が拡大してきていることは、既に報告されているが（荻野 1990）、どのように「つ」の使用が拡大しているのかについては、明らかにされていない。そこで、本研究では、個々の助数詞に代わって用いられやすいと考えられる「つ」

に着目し、母語話者へのアンケートを用いて、助数詞「つ」がどのように捉えられているかを明らかにし、現に拡大しているのかについて考察する。

2. 日本語の助数詞

2.1 助数詞の定義

三保 (2006: 22) は、助数詞を以下のように説明している。

助数詞とは、数詞にそえられ、数えられるその対象（もの・こと）の性質・形状・様態・種類などを表わす語である。対象についてのイメージを与え、または、対象の属するクラスや範囲等をも示しているため、類別詞・分類辞・範疇詞といった言葉で説明されることもあり、これに相当する語を、量詞（中国語圏）・クラサファイア classifier（英語圏）などという国もある。

2.2 助数詞「つ」について

Zubin and Shimojo (1993) では、「つ」と「個」を一般助数詞 (general classifier)、
「枚」や「本」など数える対象の形状や機能により使用される助数詞を特定助数詞 (specific classifier) として区別している。また、Zubin and Shimojo (1993) は、一般助数詞 (general classifier) には、complement、default、unspecified referent の3つの機能があるとしている。complement は、特定助数詞では数えられない部分を補う機能だとされ、default は、特定助数詞が使われる範囲内で、特定助数詞よりも一般助数詞の方が文脈などから考えてふさわしい場合に用いられる機能、unspecified referent は、指示対象を分類する情報が少ない、または無く、特定助数詞を選択できない場合に用いる機能だとされている。

Shimojo (1997) によると、「つ」の使用は一番古いものは古事記で見られることが明らかになっている。「個」も「つ」と同様に一般助数詞とされるが、両者の違いは、「個」は、固体で3次元であり、手に持てるくらいの大きさという意味特徴があり、それに対し「つ」は、明確な特徴がないため、Shimojo は「つ」の方が「個」よりもより一般助数詞らしいと述べている。

3. 先行研究

3.1 助数詞「つ」の特性に関する先行研究

3.1.1 日本語母語話者の使用実態をみた研究

谷原他 (1990) は、「面」・「枚」・「本」・「個」・「つ」の5つの助数詞がどんな特性を持つ物に最も典型的に用いられるかを明らかにするため、つくば近辺の老人クラブや婦人会、大学教授、研究所に勤める研究者、筑波大学の学生など老若男女 425 人を対象にアンケート調査を行なった。使用した助数詞は、「つ・個・面・枚・本・機」である。

アンケートは、個々の名詞（じゃがいも、黒板、グループなど）に対して2～4種類の助数詞を付けた文を用意し、「使うし自然」・「使わないが自然」・「使わないし不自然」の3つの選択肢から選ぶ形式のアンケートを取り、30歳未満、30～50歳未満、50歳以上の3グループに分け、分析を行なった。その結果、「つ」は、抽象的なものにも、具体的なものにも形や大きさにはほぼ関係なく使えると報告している。ただ、「つ」の自然度が低い名詞には、他に自然度が高い助数詞があると述べている。

松本（1991）は、個々の類別詞の意味構造とそれらが構成する体系の性質を明らかにし、また、その分析が形態素の意味構造と体系にどのような新しい見方を提供するかを考察するため研究を行なった。原型意味論の枠組みを採用し、一般の日本語話者が日常使っている類別詞の使用を分析対象にして、札幌出身者である松本自身の内省と観察、及び東京近辺出身の20代後半の話者5名の内省をデータとし、分析を行なった。その結果、個々の助数詞の非典型的指示物には「つ」の許容度が高くなると述べている。

Zubin and Shimojo（1993）は、一般助数詞「つ」と「個」の概念を正確に定めるため、日本語母語話者11人に名詞を与え、「つ」「個」を使用するかどうか聞くタスクを行なった。その結果、「つ」「個」が使われていたものは、個々の特定助数詞カテゴリーの周辺部にあるものであった。

松本（1991）は、「つ」の許容度は個々の助数詞の非典型的指示物に対して高くなると述べ、Zubin and Shimojo（1993）も、個々の助数詞カテゴリーの周辺部で「つ」が使用されていたと述べており、これらの先行研究は共通して、個々の助数詞カテゴリーのプロトタイプから遠い程、「つ」が使われやすいことを示している。

プロトタイプとは、カテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象的合成物もしくは集合体のことを言い、私たちが事物をカテゴリー化する場合、プロトタイプを核とし、その周りに様々な成員を位置付けることで全体を構造化していると言われている（河上1996）。

3.1.2 「つ」と「個」を比較した研究

飯田（1998）は、「つ」と「個」の置き換えはどの程度可能なのか、また置き換えの制限があるなら、どのような点においてなのかを明らかにするため、新聞の見出しと本文記事、そして電子化された小説をデータベースとして、使用された「つ」と「個」を検索し分析を行なった。その結果、「つ」と「個」両方を受容する名詞もあるが、名詞の具体性によって使い分けがあり、「つ」は、比喩的・抽象的な用法において名詞を数える場合、あるいは正確な数値などが不要な場合、更に、具体的な物体であっても部分・部門を言う場合や集合・まとまりを言う場合に用いられると述べている。

飯田（1999a）は、「個」で数えるものと「つ」で数えるものにはどのような差異があるのかを調べるため、新聞記事のデータベースを使用し、「つ」の数詞の制限内（1から9までの自然数）で調査した。その結果、「個」を用いて数えている例が160例あつ

たのに対し、「つ」を用いて数えている例が 898 例と約 5.6 倍あり、「つ」の方が「個」よりも多く、事物を数える際に頻繁に用いられているという結果となった。そして、「つ」の 8 割が抽象名詞（事件、方法、疑問、可能性、理由等）、残り 2 割が「個」と置き換えを許す有形名詞であったと報告している。

前述のように Shimojo (1997) は、一般助数詞である「つ」と「個」の違いについて、「個」は、固体、3次元、手に持てるくらいの大きさという意味特徴があるとし、「つ」は、明確な特徴を持たないとしている。

これらの研究結果から、「つ」は名詞の具体・抽象問わず使えることが明らかになっている。

3.2 助数詞「つ」の使用範囲に関する先行研究

上に述べたように「つ」が本来どんなものに使われているかは徐々に明らかにされているが、その使用の広がりや制限について見た研究は、あまりなされていないようである。

荻野 (1990) は、3.1.1 で挙げた谷原他 (1990) と共同でデータを取り、助数詞の意味変化を見るため、分析を行なった。その結果、「つ」は、極めて不自然な言い方（飛行機 3 個等）や誰もが普通に使う言い方（グループ 3 つ等）では、年齢差は出なかったが、その中でも若い人の方が「使うし自然」とすることが多いことから、「つ」は、使われる範囲が広くなり、さらに多く使われる傾向にあると述べている。そして、「現代の若者は、助数詞を単純化し、何にでも「つ」を使ってすます傾向がうかがえるわけである」（荻野 1990: 74）と述べ、「その使用範囲がいつそう広がりつつあるということはその他の助数詞の衰退を示唆すると解釈できよう」（荻野 1990: 74）とも述べている。

ところが、一方で、より古い時代の助数詞の通時的な変遷を見た Shimojo (1997) では、1887 年から 1987 年の聖書や文学作品での「つ」と「個」の使用の変化を調査し、1887 年の資料で「つ」で数えられていたものが、徐々に特定助数詞で数えられるようになってきたことを報告している。

Shimojo (1997) が述べるように、1887 年の資料で「つ」で数えられていたものが年を経ると特定助数詞で数えられるようになり、荻野 (1990) が述べるように、現代の若者の「つ」の使用範囲が拡大しているのだとしたら、「つ」が使われ始めた時は広く使われていたが、だんだんと使用範囲が狭くなり、そして、また使用範囲が広がるという変遷を辿っていることになる。しかし、単に「つ」の使い方が昔に戻っているわけではなく、「つ」に広がるものと広がらないものがあるのではないだろうか。また、荻野 (1990) の研究は、日本語母語話者が日常的にどのような助数詞を使用しているのかについて見たものであり、「つ」の使用範囲が拡大していることを指摘してはいるが、どのように広がっているのかについては触れられておらず、また、何故使用範囲の拡大に至っているのかについても考察されてはいない。

3.3 研究課題

上で記したように、助数詞「つ」に関する研究はいくつかあるが、まだ多くは行われていない。これまでの研究で、「つ」の使用範囲が拡大してきていることが明らかにされたが、どのように使用範囲が拡大し、また何故使用範囲の拡大に至っているのかについては言及されていない。

荻野(1990)は、助数詞を単純化し、何にでも「つ」を使ってすます傾向がうかがえ、助数詞の衰退が示唆されると述べているが、そのような単純な説明で良いのだろうか。すべての助数詞が「つ」になっているわけではない。どのような場合に、「つ」が使われやすく、どのような場合には、「つ」にはならないのだろうか。助数詞(類別詞)の働きは、対象の属するクラスや範囲等を示しているものであり、Shimojo(1997)で、そのような必要性を話者が感じない場合には本来使われるとされる助数詞が使われにくくなっていることや、逆に「つ」のほうが話者が伝えたいことが伝わりやすいために「つ」が選択される場合もあることが述べられている。そのように考えると、使用場面や使用意図、使用環境なども考慮に入れて、特定助数詞が使われるのか「つ」が使われるのかを見ていく必要があるだろう。また、そのような形で、助数詞の選択に何が影響しているかを見ていくことは、日本語母語話者が何を伝えるために助数詞を使うのかを探ることにもつながるかもしれない。

そこで、本研究では、使用場面や使用意図を設定したアンケートを作成し、日本語母語話者が、助数詞をどう捉えているのか考察する。また、どのような時に「つ」が使われるのか考察を行なう。

4. 研究方法

本研究では、日本語を母語とする若者がどのように「つ」を捉えているのかを見るため、日本語母語話者を対象にした選択式アンケートを用い、分析を行なった。選択式アンケートを使用した理由は、自分が通常使う助数詞だけではなく、自分が使用しない助数詞を使った場合にどのような印象を受けるかということも見るためである。アンケートに使用した名詞は、コーパスにより抽出を行なった。コーパスは、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いた。コーパスから、特定助数詞があるにも関わらず「つ」や「個」が使用されていた名詞を抽出し、その使用例を基にアンケートを作成した。アンケートでは「つ」だけではなく「個」も含めたが、本論文は「つ」に焦点をあて、論じる。

アンケートの形式を以下に示す。

金貨をできるだけ集めていくというゲームで。

a. 金貨を 2 つ	ゲットした。	1	2	3	4
b. " 2 個	"	1	2	3	4
c. " 2 枚	"	1	2	3	4
d. " 8 つ	"	1	2	3	4
e. " 8 個	"	1	2	3	4
f. " 8 枚	"	1	2	3	4

上の質問では、「金貨をできるだけ集めていくというゲームで。」という場面を設定し、「金貨を__ゲットした。」という文の__部分に2つ、2個、2枚、8つ、8個、8枚をそれぞれ入れた文を示し、それぞれについて4つの選択肢から選んでもらうというものである。選択肢は、1「自分はよく使用するし、自然である」、2「自分は使用するが、正しい使い方とは思わない」、3「自分は使用しないが、他の人が使用していても違和感を感じない」、4「自分でも使用しないし、違和感を感じる(あるいは、正しくないと思う)」とした。もし、自分がどの助数詞も「使用するし、自然」だと思うのであれば、全て1に丸をつけても良いとしている。そして、できるだけ、直感的に選んでもらうようにした。

1つの質問の中に、金貨なら「枚」、そして、一般助数詞「つ」と「個」の3つの助数詞を含めている。個々の質問に使用する特定助数詞は、飯田朝子(2004)『数え方の辞典』から取り出した。

アンケートでは、指示対象物の数を2と8とした。数を2種類にしたのは、数字の大小によって「つ」の使われやすさが異なる可能性があると考えたからである。また、コーパスを見た結果「ひとつ」は「何一つない」「ひとつも」のような定形表現としての使用が多いことがわかり、フレーズ化して高頻度で使われていることが影響する可能性があるため、小さい数としては2を採用した。また、大きい数としては、9を和語の数詞で数えた場合、「このつ(九つ)」となり、「ななつ(七つ)」や「やっつ(八つ)」など他の数字よりもモーラ数が増え、それが影響を与える可能性もあるため、次に大きい8を採用した。

問題数は17問⁽¹⁾で、用いた助数詞は「枚」「脚」「組」「足」「台」「本」「通」だが、「枚」については質問数を増やし、名詞や形状、使用場面の違いにより比較した。対象者は、千葉県内の18~22歳の大学生、女性19名、男性15名の計34名である。

なお、本研究は若者が助数詞をどのように使用しているのかをみるための予備的調査であり、また、通時的な調査ではないため、使用の変化を見られるものではなく、その意味では使用範囲の「拡大」そのものをみることはできない。しかし、「つ」の使用範囲の拡大そのものは先行研究で指摘されているものであるため、本研究では、本来特定

助数詞を使うとされるものに対しての「つ」の使用を見ることで、使用範囲の拡大を考える手がかりを得たいと考える。

5. 結果と考察

ここでは、特定助数詞よりも「つ」のほうが「使用するし、自然」を選択する人が多かったもの、「つ」よりも特定助数詞のほうが「使用するし、自然」を選択する人が多かったもの、場面や名詞によって「つ」の使用に違いがみられたものという順に結果を示し、最後に数字による違いの観点からの結果を示す。

5.1 特定助数詞よりも「つ」の方が多く選択されたもの

本来使われるとされる助数詞よりも「つ」のほうが、「自分によく使用するし、自然である」の回答が多かったものは、「脚」、「組」であった。

5.1.1 「脚」

コーパスでは、椅子を使った数学の問題の中で「つ」が使われていた。アンケートでは、場面によって違いが出る可能性も考慮し、椅子を移動させる時と、ダイニングに置く椅子を新しく買ったことを言う時の二つの場面を設定した。その結果、場面による違いはみられなかったが、どちらの場面でも本来使われるとされている「脚」よりも「つ」の方が「自分によく使用するし、自然である」と感じている人が多くみられた。「脚」を「自分によく使用するし、自然である」とした答えは、半数以下であった。結果は表1、表2の通りである。表の一行目の数字は、選択肢を示しており、1「自分によく使用するし、自然である」、2「自分は使用するが、正しい使い方とは思わない」、3「自分は使用しないが、他の人が使用していても違和感を感じない」、4「自分でも使用しないし、違和感を感じる（あるいは、正しくないと思う）」である。2、3行目の数字は、各選択肢を選んだ人の数である。表では、指示対象物の数が2の場合の回答を示す（以下、特に断りのない限り、どの表でも同様である）。

表1 「椅子を移動させる時」に関する質問の結果

質問文：「椅子を2 脚/つ 隣の部屋に持って行って。」

	1	2	3	4	無効
脚	12	6	16	0	
つ	19	10	2	3	

表2 「ダイニングに置く新しい椅子を買った時」に関する質問の結果

質問文：「ダイニングに置く椅子を2 脚/つ 買った。」

	1	2	3	4	無効
脚	15	5	11	3	
つ	18	11	3	2	

5.1.2 「組」

コーパスでは、買い物の場面で、手袋と帽子を買ったことを言う時に「つ」が使われていた。アンケートでは、パーティーでのプレゼント用に手袋を買ったことを言う場面を設定した。表3で示すように、「組」でも「脚」同様、本来使われるとされる「組」より「つ」を「自分はよく使用するし、自然である」と感じている人の方が若干ではあるが上回る結果となった。「組」を「自分はよく使用するし、自然である」とした回答は、半数以下であった。

表3 「パーティーでのプレゼント用に手袋を買った時」に関する質問の結果

質問文：「手袋2 組/つ 買った。」

	1	2	3	4	無効
組	16	3	11	4	
つ	19	10	3	2	

本来使うとされる助数詞を「自分はよく使用するし、自然である」とした人が半数以下だったのは、今回の調査に用いた助数詞の中で「脚」と「組」の二つだけであった。なぜ、「脚」や「組」を「使うし、自然」とした人が少なかったのだろうか。「脚」は、椅子や机など脚のある家具を数える場合に、また、「組」は、個々のものが組み合わさってひとまとまりになっているものを数える場合にしか使われない。「本」や「台」などの助数詞は、「本」であれば、細長いものや比喩的な用法として交通の便や作品等に使用され、「台」であれば、人や物を載せるものや乗り物、機械類を数える際に使用されるというように、様々な名詞に使われる。しかし、それに比べると「脚」や「組」は共起する名詞が少ない。したがって、日常での使用頻度も低くなるだろう。日常的に接することが少ない助数詞であるため使われにくくなり、その代わりに「つ」を使用するとした回答が多かったのではないだろうか。

5.2 「つ」よりも特定助数詞の方が多く選択されたもの

ここでは、「つ」よりも本来使われるとされる助数詞のほうが「自分は使用するし、自然である」の回答が多かったものを示す。5.1で挙げたもの以外は、全ての設問で特定助数詞のほうを「自分はよく使用するし、自然である」とした回答が多くみられた。

5.2.1 「通」

コーパスでは、携帯電話で受信したメールについて述べる場面で「つ」が使われていた。アンケートでは、Eメールが届いていたことを友達に知らせる場面を設定した。「通」と「つ」を比較すると、表4で示すように、「つ」よりも「通」を「自分は使用するし、自然である」と考えている人が圧倒的に多くみられた。また、「つ」を「自分でも使用しないし、違和感を感じる（あるいは、正しくないと思う）」と感じている人が半数以上いた。

表4 「Eメールが届いていたことを友達に知らせる時」に関する質問の結果

質問文：「メールが2 通/つ 届いているよ。」

	1	2	3	4	無効
通	27	4	2	0	1
つ	5	4	7	17	1

「通」は文書やメッセージに用いられる助数詞で、上記 5.1 で挙げた「脚」「組」同様、共起する名詞の範囲が広くはない。それにもかかわらず、「脚」「組」と比較すると「通」を、「自分は使用するし、自然である」と回答する人が多いことがわかる。この違いは、助数詞そのものの使用頻度が関わっているのではないだろうか。「脚」「組」と「通」を比較すると、「通」は、日常生活の中で頻繁に使われるメールなどにも使用される助数詞であり、机や椅子を数える機会に比べれば、手紙やメール等の数に言及することは多いことが予想される。「脚」「組」と「通」の間にこれだけの違いが出たのは、接触頻度や使用頻度の差が、関わっているのではないだろうか。ここでは推測以上のことは言えないが、使用頻度が助数詞の使用にどのような影響を与えるか、今後検証が必要である。

5.2.2 「本」

コーパスでは、携帯電話の画面上に表示されている電波の強さを表すアンテナ記号についての話をする際に「つ」が使われていた。アンケートでは、コーパスで見られた使用と同じ場面を設定した。携帯電話の電波の強さを表すアンテナ記号は、通常3本であるため、他の項目と異なり、アンケートでは数字は3を使用した。結果は、表5に示したように、「本」はほとんどの人が「自分はよく使用するし、自然である」を選んでおり、「つ」においては、選択肢1、2、3、4にあまり差はみられなかった。

表5 「携帯電話のアンテナ記号を見た時」に関する質問の結果

質問文：「アンテナが3 本/つ 立ってる。」

	1	2	3	4	無効
本	29	5	0	0	
つ	11	7	7	9	

表からわかるように、「つ」を「自分はよく使用するし、自然である」と考えている人と「自分でも使用しないし、違和感を感じる（あるいは、正しくないと思う）」と考えている人がほぼ同数であった。これは、「つ」の容認度が二つに大きく分かれたことを示している。なぜ、このように人によって容認度に差が現れたのだろうか。松本（1991）は、「本」は、細長い（一次元的な伸びぐあいが目立つ）もの、つまり、「一次元的」なものに使われると述べている。そして、「本」の指示物の中には、細長さがあまり顕著ではないズボンやギターなども含まれており、どのくらい細長ければ一次元的と言えるかという容認度には個人差があると報告している。携帯電話の電波を表すアンテナ記号は、携帯電話の画面の上に小さく示されており、細長くあるものの、細長さが際立っているとは言えない。よって、携帯電話の電波を表すアンテナ記号を一次元的と捉えるかどうかには個人差が生まれ、一次元的と捉えなかった場合、「本」の容認度が下がり、反対に「つ」の容認度が上がったのだと考えられる。

5.2.3 「台」

コーパスでは、携帯電話をいくつ持っているのかを言う時に「つ」が使われていたため、携帯電話の所有数を言う時と、テーブルに置いてある携帯電話の数を言う時の二つの場面を設定した。その結果、「台」、「つ」ともに、またどちらの場面も「自分は使用するし、自然である」を選択する人が多い結果となった。そして、「台」と「つ」を比較すると、「つ」よりも「台」の方が「自分は使用するし、自然である」と考えている人が多くみられた。結果は表6、表7の通りである。

表6 「友人と仕事用の携帯電話を所有していることを言う時」に関する質問の結果

質問文：「私は2 台/つ の携帯電話を使い分けている。」

	1	2	3	4	無効
台	25	2	6	0	1
つ	19	8	3	4	

表7 「テーブルに置いてある携帯電話の数を言う時」に関する質問の結果

質問文：「携帯電話がテーブルの上に2 台/つ 置いてある。」

	1	2	3	4	無効
台	24	4	5	1	
つ	16	11	1	6	

「台」の場合、「つ」を「自分は使用するし、自然である」と回答する人も多くみられた。松本(1991)は「台」の典型条件の一つとして「機械性」、「片手で握れる大きさより大きい」、「硬い表面上にある」を挙げている。携帯電話は、典型条件の「機械性」を満たしているが、「片手で握れる大きさより大きい」は満たしていない。また、携帯電話は持ち歩くものであり、「硬い表面上にある」という条件も満たしていない。松本(1991)は、「台」の典型性はその指示物に対する「つ」の使用の容認度と関連があることを指摘しており、「台」の容認度が高いものは「つ」の容認度が低く、「台」の容認度が低いものには、「つ」の容認度が高くなると述べている。松本(1991)の指摘通り、携帯電話の場合、「台」の典型条件の一つである「片手で握れる大きさより大きい」と「硬い表面上にある」が満たされていないため、「つ」の容認度が上がったのだと考えられる。

5.3 「つ」の使用に違いがみられたもの

ここでは、本来使われるとされる助数詞よりは少なかったものの、場面や指示対象によって、「つ」の使用に違いがみられたものを示す。

5.3.1 「足」

コーパスでは、ブーツを大型キャリーバックに詰めた場面で「個」が使われていた。アンケートでは、スニーカーを袋に片付ける場面と、スリッパを下駄箱から取り出す場面の二つを設けた。アンケートの結果は、表8、表9に示すように、下駄箱からスリッパを取り出す時の方が、「つ」を「自分はよく使用するし、自然である」と感じている人が多くみられた。また、スニーカーを片付ける場面では、選択肢1「自分はよく使用するし、自然である」と選択肢4「自分でも使用しないし、違和感を感じる(あるいは、正しくないと思う)」を選んだ人が10名ずつと同数である。一方、下駄箱からスリッパを取り出す場面では、選択肢1「自分はよく使用するし、自然である」が17名で半数以上となっているが、選択肢4「自分でも使用しないし、違和感を感じる(あるいは、正しくないと思う)」を選んだのは2名のみで非常に少ない。このことから下駄箱からスリッパを取り出す時の方が、スニーカーを片付ける時よりも「つ」が用いられやすいことがわかる。

表8 「スニーカーを片付ける時」に関する質問の結果

質問文：「袋の中にスニーカーを2 足/つ 詰め込んだ。」

	1	2	3	4	無効
足	24	5	5	0	
つ	10	7	7	10	

表9 「下駄箱からスリッパを取り出す時」に関する質問の結果

質問文：「下駄箱からスリッパを2 足/つ 取り出した。」

	1	2	3	4	無効
足	22	4	5	3	
つ	17	11	4	2	

「下駄箱からスリッパを2つ取り出した」場面と「袋の中にスニーカーを2つ詰め込んだ」場面で、なぜ、このような違いが出たのだろうか。これには、形状が関係しているのではないだろうか。「足」は、ソックスや足袋、ストッキングなどの靴下類や、靴やブーツ、サンダルなどの履物の左右ひとそろいを数える際に用いる助数詞である。スニーカーとスリッパを比べてみると、スニーカーは、足の甲や回りが全て覆われる構造となっており、足の甲を半分ほど入れるだけのスリッパと比べ、より「履く」物らしさがあるのではないだろうか。また、スリッパは、履く場面も室内と限られており、左右が明確に決まっているわけでもない。このように、構造や用途をみると、スニーカーの方がスリッパに比べ、より「足に履く物」らしさを持っている。つまり、「足」のプロトタイプに近い「つ」になりにくいのだろう。そして、「足」のプロトタイプにスニーカーほど近くないスリッパは「つ」になりやすいのではないかと考えられる。

5.4 「枚」

5.4.1 紙

コーパスでは、紙に対して「つ」が使われる例がみられたため、アンケートでは、紙の大きさを変えて、A4サイズのコピー用紙とハガキサイズの画用紙を取ってもらう場面で設問を設定した。結果は表10、表11のように、A4サイズのコピー用紙の場合、選択肢1の「自分によく使用するし、自然である」と回答した人は4名であったが、ハガキサイズの画用紙の場合は13名と、ハガキサイズの画用紙の方が「つ」を「自分によく使用するし、自然である」と感じている人が多かった。また、選択肢4の「自分でも使用しないし、違和感を感じる（あるいは、正しくないと思う）」でも差がみられ、A4サイズのコピー用紙では16名、ハガキサイズの画用紙では9名であり、A4サイズのコピー用紙の方が「自分でも使用しないし、違和感を感じる（あるいは、正しくないと思う）」と回答した人が多かった。

表 10 「近くにある A4 のコピー用紙を取ってもらう時」に関する質問の結果

質問文：「その紙 2 枚/つ 取ってくれる？」

	1	2	3	4	無効
枚	32	1	0	1	
つ	4	7	7	16	

表 11 「近くにあるハガキサイズの画用紙を取ってもらう時」に関する質問の結果

質問文：「その紙 2 枚/つ 取ってくれる？」

	1	2	3	4	無効
枚	34	0	0	0	
つ	13	6	6	9	

このように、どちらも紙というカテゴリーに含まれるが、大きさによって「つ」の許容度に違いがみられた。これは、何故だろうか。飯田 (1999b) は「枚」の使用には「平面的」であるという他、サイズが関わることを指摘しており、大きい方が「枚」で数えやすいとしている。「枚」の容認度が上がれば、「枚」の代わりに用いられる助数詞の容認度は下がると考えられる。つまり、大きい方が「枚」で数えやすいということは、大きいと「つ」の容認度は低くなると言えそうである。このことから、紙という同じカテゴリーに属していても、大きい A4 サイズのコピー用紙は「つ」が使用されにくく、小さいハガキサイズの画用紙の方が「つ」が使用されやすいのではないかと推測される。

5.4.2 金貨

コーパスでは、ゲームの中の金貨を集めるという場面で、画面上での「賞品」としての「金貨」について「つ」が使われていた。アンケートでは、ゲームの中の金貨を集める時と、本物の金貨を友人からもらう時という場面を変えた設問を設けた。表 12、表 13 で示すように、選択肢 1 の「自分はよく使用するし、自然である」と回答した人は、ゲームの場合では 14 名、友人から貰う場面では 19 名と、友人から貰う場面の方が「つ」を「自分はよく使用するし、自然である」と感じている人が多いことがわかる。また、ゲームの場面のほうが、友人から貰う場面よりも「自分でも使用しないし、違和感を感じる（あるいは、正しくないと思う）」とした人が多かった。このことから、ゲームという二次元の世界よりも現実世界で友人から貰う方が「つ」が使用されやすいと言える。

表12 「金貨をできるだけ集めていくゲームのことを言う時」に関する質問の結果
質問文：「金貨を2枚/つ ゲットした。」

	1	2	3	4	無効
枚	30	2	0	1	1
つ	14	6	4	10	

表13 「ワールドカップの記念金貨を友人から貰った時」に関する質問の結果
質問文：「友人からワールドカップの記念金貨を2枚/つ 貰った。」

	1	2	3	4	無効
枚	30	2	2	0	
つ	19	8	5	2	

これは、「枚」のプロトタイプに関わるとされている「平面性」が関係しているだろう。飯田(1999a)は、「枚」であれば平面的であるということが、その物体の最も顕著な特徴でなければならないと述べている。実際に金貨をもらう場面では、ゲームと違って重みや立体感を感じるため、平面性が薄れるのではないだろうか。平面性が薄れるということは、「枚」のプロトタイプから離れるということである。そのため、ゲームよりも実際に受け取る場面の方が「つ」の許容度が上がるのだと考えられる。

5.4.3 花びら

コーパスでは、花について説明する際に、「個」が使われていた。アンケートでは、コスモスの花について説明する場面と、桜の花びらを拾う場面の二つの場面を設定した。花びらについては、コスモスの花びらは8枚であるため、「コスモスの花は、___の花びらで出来ている」という説明の場面では、数字が8の質問しか設定していない。そのため、表14、表15では、桜の花びらを拾う場面についても、数字が2ではなく、8の場合を示す。結果は、表14、表15に示すように、選択肢1の「自分はよく使用するし、自然である」を選択した人は、説明する場面では12名であったのに対し、拾う場面では4名と、説明する場面の方が「つ」を「自分でもよく使用するし、自然である」と考えている人が多いことがわかる。また、選択肢4の「自分でも使用しないし、違和感を感じる(あるいは、正しくないと思う)」を見てみると、説明する場面では7名なのに対し、拾う場面では19名と半数以上おり、説明する場面と比べて多いことがわかる。

表 14 「コスモスの花を説明する時」に関する質問の結果

質問文：「コスモスの花は、8 枚/つ の花びらで出来ている。」

	1	2	3	4	無効
枚	31	2	1	0	
つ	12	6	9	7	

表 15 「公園で桜の花びらを拾った時」に関する質問の結果

質問文：「公園で8 枚/つ 花びらを拾った。」

	1	2	3	4	無効
枚	31	3	0	0	
つ	4	7	4	19	

松本（1991）は、「枚」が使用される条件として「空間的に独立的」、「二次元的」という2つを挙げている。拾う場面では、花びらが一枚一枚落ちているため、個々の花びらが空間的に独立的であるが、説明する場合は、花を構成する一部として捉えられるため、個々の花びらが空間的に独立的とは言えない。また、落ちている花びらは平面的で二次元的だが、コスモスの花を説明する場合は、花全体の形が立体的となるため、花びらも二次元性が薄れるのだろう。そのため、「枚」のプロトタイプから遠くなり、「つ」がより使われやすいのではないかと考える。

5.4.4 シール

コーパスでは、壁に立てかけてあるボードに書かれたアンケートに答えるために、入場時に丸いシールをもらうという場面で、「つ」が使われていた。アンケートでは、大きさによる違いが影響する可能性も考え、丸いシールを縦一列に貼っていく時と宛名シールの残りが少ないことを言う時の二つの場面を設定した。二つの場面による差はみられず、「枚」は、ほとんどの人がどちらの場面でも「自分は使用するし、自然である」を選択しており、「つ」も「自分は使用するし、自然である」を選択する人が多くみられた。結果は表 16、表 17 の通りである。

表 16 「シールを貼る作業をしている時」に関する質問の結果

質問文：「丸いシールを2 枚/つ ずつ縦一列に貼っていく。」

	1	2	3	4	無効
枚	32	1	1	0	
つ	18	7	7	2	

表17 「シールが残り少ないことを知った時」に関する質問の結果

質問文：「宛名シールが、あと2枚/つしかない。」

	1	2	3	4	無効
枚	30	1	3	0	
つ	20	6	4	4	

シールと同じく「枚」を使用する名詞の紙や金貨、花びらと比べると、シールに関しては、場面に関わらず「つ」を「自分は使用するし、自然である」と回答する人が多くみられた。前述のように、松本(1991)では、「枚」が使用される条件の一つとして「空間的に独立的」を挙げている。しかし、シールは、一つ一つが台紙に貼られているため、シールと台紙が一枚の紙のようになっており、個々のシールは、そこから剥がして使われる。そのため、「空間的に独立的」という条件を満たしにくく、「枚」のプロトタイプから離れるため、「つ」の許容度が上がったのではないかと考える。

5.5 数による違い

ここでは、アンケートで用いた小さい数字2と大きい数字8を比べた結果を述べる。

アンケートでは、特定助数詞に関しては、数字が2でも8でも回答に大きな差はみられなかった。このことから、名詞に本来使われるとされてきた助数詞は、その用いられ方に数の大小は影響しないという結果になった。それに対して、助数詞「つ」は、選択肢1の「自分はよく使用するし、自然である。」を選ぶ人は、数字が2の時よりも8の時の方が少ない傾向が全体的にみられた。選択肢1の「自分はよく使用するし、自然である」を数字が2の場合、8の場合で見ると、表18⁽²⁾の通りである。

表 18 「つ」の使用を 2 と 8 で見た結果

項目/数字	2	8
金貨をできるだけ集めていくというゲームで。	14	9
近くにある A4 のコピー用紙を取ってもらう時。	4	1
友人と仕事用の携帯電話を所有していることを言う時。	19	10
テーブルに置いてある携帯電話の数を言う時。	16	8
椅子を移動させる時。	19	15
シールを貼る作業をしていて。	18	12
スニーカーを片付けていて。	10	7
E メールが届いていたことを友達に知らせる時。	5	5
パーティーでのプレゼント用に手袋を買った時。	19	10
下駄箱からスリッパを取り出す時。	17	16
ワールドカップの記念金貨を友人から貰った時。	19	15
封筒に宛名シールを貼ろうとした時に、シールが残り少ないことを知って。	20	13
ダイニングに置く新しい椅子を買った時。	18	14
近くにあるハガキサイズの画用紙を取ってもらう時。	13	9

なぜこのような違いが出るのだろうか。アンケート調査に先行して行なったコーパス調査では、数字が 1 から 9 へと大きくなるにつれて、「つ」の使用数が減ることが確認された。このことから、「つ」は、1 に近い数ほど高頻度で使用され、9 に近い数ほど使用頻度が減ることがわかる。使用される頻度が高く、接触する機会が多くなることが、「つ」の許容度に影響しているのではないだろうか。「つ」の許容度には、数の大小も影響すると考えられるが、今後詳しく調査する必要がある。

6. 総合的考察

本研究では、日本語母語話者を対象にしたアンケートで予備的調査を行ない、助数詞「つ」と特定助数詞がどのように捉えられているのかをみた。

荻野 (1990) は助数詞「つ」の使用範囲が拡大していると述べているが、本研究の結果では、助数詞「つ」に「自分はよく使用するし、自然である」という選択肢が集中するという結果は得られず、むしろ本来使われるとされる助数詞に対して「自分はよく使用するし、自然である」と回答した人が多かった。しかし、本来使われるとされてきた助数詞より多くないものの、「枚」、「本」のような日常生活での使用頻度が高いであろう助数詞で、「つ」を「自分もよく使用するし、自然である」と回答する人もいた。

共起する名詞の範囲が広くない「脚」、「組」は、特定助数詞よりも「つ」を「自分でもよく使用するし、自然である」と回答する人の方が多かった。しかし、頻繁に使用す

るメールなどを数える「通」の場合、「脚」、「組」よりも特定助数詞を「使用するし、自然」と回答する人が多かった。共起する名詞の範囲が狭い助数詞は「つ」が許容されやすいと言えそうではあるが、日常生活での接触頻度の影響もかなり大きい可能性があり、今後検証する必要がある。

また、指示対象や場面の違いによって「つ」の選ばれ方に違いが出たものもあった。松本(1991)や Zubin and Shimojo (1993)では、個々の助数詞のプロトタイプから離れる程「つ」になりやすいと報告されている。本研究でも、名詞や場面の違いによって、「つ」の使用に違いがみられた「足」や「枚」では、個々の助数詞のプロトタイプに近いものほど特定助数詞が選ばれやすく、遠いもの程「つ」が選ばれやすいという傾向がみられた。この傾向は、指示対象の形状だけではなく、花びらでは、一枚ずつ落ちているのか、花の一部になっているのかというように、指示対象がおかれた状況の変化によってもみられた。このことから、指示対象の形状が、個々の助数詞のプロトタイプに近いかどうかだけではなく、状況の変化によっても助数詞のプロトタイプへの近さが変化し、それが助数詞の使用に関わることが示唆された。

我々は助数詞を使用する際に、「この名詞はこの助数詞で数える」というような1対1の結びつけをしているわけではなく、また、どの助数詞も全て「つ」や「個」にして、済ましているというわけでもない。本研究では、「つ」の使用範囲が拡大していると言っても、何にでも「つ」を使用するようになっているわけではなく、その使用範囲の拡大にも、形状や状況、助数詞自体の使用頻度、数の大小などが影響していることが示唆された。

7. 今後の課題

本研究では、個々の助数詞のプロトタイプから遠い場合には「つ」が使われやすく、近い場合には「つ」が使われにくいというように、「つ」の使用とプロトタイプに関係があることが示唆された。また、共起する名詞が広くない助数詞の中で「つ」の使用に差があったことから、助数詞自体の使用頻度も助数詞選択に関わるとみられるが、事例が少ないため、深く触れることができなかった。そして、「つ」の許容度には数の大小も関係するという結果が得られたが、頻度の影響かどうかもまではわからなかった。以上のことを踏まえ、今後は、典型性が助数詞選択にどう関わっているのか、また、状況の変化が助数詞選択へどう影響するのかを明らかにしたい。また、助数詞自体の使用頻度や数の大小が「つ」の使用にどう関わるのか、詳しい調査を行ないたい。

[注]

- (1) アンケート実施時には、問題数は全24問であったが、本研究課題とは異なる目的での設問も含めて調査したため、本研究ではそれらを省いた17問で分析を行なった。

(2) 表 18 は、本研究課題とは異なる質問と 2, 8 を用いなかった質問を除いた 14 項目で分析を行なった。

付記

本論文は、2012年に麗澤大学大学院言語教育研究科に提出した修士論文『助数詞「つ」と「個」の使用範囲に関する一考察：母語話者アンケートを用いて』の一部を加筆・修正したものである。本稿の執筆にあたり、査読をしてくださった先生方に貴重なご助言を頂いた。ご助言を頂いた先生方に深謝申し上げます。また、アンケート調査にご協力してくださった麗澤大学の学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 飯田朝子 (1999a) 「〈一個〉と〈一つ〉は置き換えられるか—いわゆるひとつの助数詞考」『月刊言語』28 巻 10 号, pp.38-41.
- 飯田朝子 (1999b) 『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文
- 飯田朝子 (2004) 『数え方の辞典』小学館
- 荻野綱男 (1990) 「現代日本語の助数詞の意味変化の方向」『文藝言語研究、言語篇』17, pp.67-77.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社
- 谷原公男・顔瑞珍・デビー＝リー (1990) 「助数詞の用法とプロトタイプ—〈面〉・〈枚〉・〈本〉・〈個〉・〈つ〉—」『計量国語学』17 巻 5 号, pp.209-226.
- 松本曜 (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系：原型意味論による分析」『言語研究』99, pp.82-106.
- 三保忠夫 (2006) 『数え方の日本史』吉川弘文館
- Shimojo, M. (1997) The role of the general category in the maintenance of numeral classifier systems: The case of *tsu* and *ko*. *Japanese Linguistics*, 35, pp.705-733.
- Zubin, D. & Shimojo, M. (1993) How “General” are General Classifiers? With Special Reference to *ko* and *tsu* in Japanese. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 19, pp. 490-502.

付録：使用したアンケート（今回論文で使用した項目のみ）

(1) アンケートの形式

1. 自分は使用するし、自然である。
2. 自分は使用するが、正しい使い方とは思わない。
3. 自分は使用しないが、他の人が使用していても違和感を感じない。
4. 自分でも使用しないし、違和感を感じる（あるいは、正しくないと思う）。

1. 金貨をできるだけ集めていくというゲームで。

- a. 金貨を2つゲットした。
- b. " 2個 "
- c. " 2枚 "
- d. " 8つ "
- e. " 8個 "
- f. " 8枚 "

1	2	3	4
1	2	3	4
1	2	3	4
1	2	3	4
1	2	3	4
1	2	3	4

(2) アンケートに使用した項目

2. 携帯電話の電波が強い場所で、携帯電話のアンテナ記号を見て。
「アンテナが（3つ/3個/3本）立ってる。」
4. 近くにあるA4のコピー用紙を取ってもらう時。
「その紙（2つ/2個/2枚/8つ/8個/8枚）取ってくれる？」
5. 友人と仕事用の携帯電話を所有していることを言う時。
「私は（2つ/2個/2台/8つ/8個/8台）の携帯電話を使い分けている。」
7. テーブルに置いてある携帯電話の数を言う時。
「携帯電話がテーブルの上に（2つ/2個/2台/8つ/8個/8台）置いてある。」
8. 椅子を移動させる時。
「椅子を（2つ/2個/2脚/8つ/8個/8脚）隣の部屋に持って行って。」
9. シールを貼る作業をしていて。
「丸いシールを（2つ/2個/2枚/8つ/8個/8枚）ずつ縦一列に貼っていく。」

10. スニーカーを片付けていて。
「袋の中にスニーカーを（2つ/2個/2足/8つ/8個/8足）詰め込んだ。」
12. 公園で桜の花弁を拾っていて。
「公園で（2つ/2個/2枚/8つ/8個/8枚）の花弁を拾った。」
13. Eメールが届いていたことを友達に知らせる時。
「メールが（2つ/2個/2通/8つ/8個/8通）届いているよ。」
14. パーティーでのプレゼント用に手袋を買った時。
「手袋（2つ/2個/2組/8つ/8個/8組）買った。」
17. コスモスの花を説明する時。
「コスモスの花は、（8つ/8個/8枚）の花弁で出来ている。」
18. 下駄箱からスリッパを取り出す時。
「下駄箱からスリッパを（2つ/2個/2足/8つ/8個/8足）取り出した。」
19. ワールドカップの記念金貨を友人から貰った時。
「友人からワールドカップの記念金貨を（2つ/2個/2枚/8つ/8個/8枚）貰った。」
21. 封筒に宛名シールを貼ろうとした時に、シールが残り少ないことを知って。
「宛名シールが、あと（2つ/2個/2枚/8つ/8個/8枚）しかない。」
22. ダイニングに置く椅子を新しく買った時。
「ダイニングに置く椅子を（2つ/2個/2脚/8つ/8個/8脚）買った。」
23. 公園で桜の花弁を拾っていて。
「公園で花びらを（2つ/2個/2枚/8つ/8個/8枚）拾った。」
24. 近くにあるハガキサイズの画用紙を取ってもらう時。
「その紙（2つ/2個/2枚/8つ/8個/8枚）取ってくれる？」

